

地域振興部門

鳥取県東伯郡東伯町 大山乳業農業協同組合

(代表：代表理事組合長 幅田信一郎)

酪農家の心を食卓へ

ー生産から販売までー



大山乳業農業協同組合のみなさん

大山乳業農業協同組合は、一貫して「生産者の手による生産・処理・加工・販売の実現」を基本理念として、自らプラントを持ち、独自の製品開発、販路開拓によって、ブランドを確立した農協プラントである。平成15年4月、県下の酪農家が100%加入し、組合員だけが生産した生乳60千tを扱う県下全域をカバーする酪農専門農協に発展し、県下酪農家の大同団結を達成した。

本組合の源流は、昭和21年に発足した「伯耆酪農組合」にさかのぼる。昭和41年、3組合による合併を契機に、現在の「大山乳業農業協同組合」に改名、その後も県下の酪農組合と合併を重ねながら、平成15年4月に最後の1組合と合併し、全国でも類を見ない県下一円の酪農専門農協に発展した。大手メーカーとのシェア争いの中で、四分五裂していた酪農組合を結集できたのは、創立以来挙げてきた「生産から販売までの一貫体制の確立」という基本理念を堅持し、プラントを基軸にした組合運営に成功した結果である。

本組合は、大手メーカー等が量販店、紙パックに傾斜してきた中で、独自製品の開発、独自販路の開拓に取り組み、生乳のルーツの明確化、瓶詰め等の方法により、西日本一帯に「白バラ牛乳(商標)」の一大ブランドを確立した。製品開発面では、牛乳以外にも乳飲料、アイスクリーム、乳製品関連菓子等、製品の多角化をすすめ、余乳から生じた脱粉などの完全活用を図っている。

販路は、主に宅配(宅配業者経由)と生協の2本立てで開拓し、山陰両県を始めとして大阪・京

都等の関西一円から中四国、北九州にまで広がっている。中でも京都生協とは33年来の取引で、牛乳の産地直送第1号と言われている。宅配は瓶詰めが主体であり、500店舗、30万世帯に及んでいる。今後は牛乳宅配ルートを使い、地元農産物の販売に活用することも考えている。また、現在の県下の学校給食牛乳はすべて本組合が供給している。

「酪農家の心を食卓へ」から始まった歴史の長い生協との交流が、都市と農村の交流を行う機会を創出、現在では拠点牧場での定期的交流、双方で拠出した基金による各種交流施設整備などに発展した。近年では、消費者自らが支援組織を作り、工場見学やファームステイなど、さらなる消費者交流の度合いを深めている。

組合経営が安定しているため、賦課金を徴収しないで充実した営農指導が行われている。このため、1頭当たり乳量水準、乳質、乳価、所得率等の生産性・収益性は周辺県を上回っており、これが生乳の生産量と乳質の安定的維持に大きく寄与している。

このように本組合は、生産者の高乳価を確保するため、自己プラントを持ち独自に加工販売を行ってきたことを起点とし、独自販路の開拓による牛乳産直の開始、消費者交流、販路拡大、新鋭工場建設へと発展、深化した先駆的事例である。直接、間接的に酪農家の経済に大きく貢献し産地を維持しているだけでなく、牛乳工場、関連業者を含め、地元経済の振興に大きな役割を果たしている。

活動のすかた



▲宅配用瓶牛乳「白バラ牛乳」

組合が自らブランドを持ち、宅配販売体制を整え、販路を開拓してブランドを確立した。シンボルマークの「白バラ」のように純粋で純良な牛乳の生産を原点としている。



▲交流施設「大山まきばみるくの里」での子牛とのふれあい風景

今では消費者との交流が一過性のものではなく定期化した。食品の信頼は生産現場をみて、感じてもらうことから始まる。



▲インターンシップ（搾乳作業）

大学生が新たな農業・農村観をもつ機会となっている。

▼瓶牛乳の宅配

酪農家が搾った高品質の牛乳をそのまま食卓へ届けている。販売高に占める宅配の割合は40%を超す。



▼平成16年春稼働予定の新工場（建設中）

飛躍の拠点として期待されており、地域経済の活性化の一翼を担っている。

